

## 痴呆性高齢者に対するドッグセラピーの試み

真野充弘・内苑まどか・西村 健

## 痴呆性高齢者に対するドッグセラピーの試み

真野充弘<sup>\*1</sup>, 内苑まどか<sup>\*2</sup>, 西村 健<sup>\*3</sup>

### 抄録

特別養護老人ホームに入所中のアルツハイマー病に罹患し、中等度痴呆を有する高齢者 10 名（男性 2 名、女性 8 名）にドッグセラピー（DT）を試みた。DT には、特別に訓練された治療犬を用い、毎週 1 回、毎回 30 分間、DT プログラムを行った。DT の効果の評価には、DT 前後に N 式精神機能検査および GBS スケールを一部改変した日常行動観察表による評価を、毎回の DT 中には本研究のために作成した行動観察表による評価を行った。その結果、N 式精神機能検査では DT 後 2 名のみに、情意面での改善による 2 次的改善がみられた。日常行動観察では、DT 後、7 名に改善が認められ、とくに、覚醒度、焦燥感、睡眠障害などの改善が顕著であった。DT 中の行動観察では DT2~3 回目まではプログラムへの興味を示したが、以後はしだいに慣れや飽きが認められるようになった。この結果はプログラムを工夫し、興味を維持できれば、持続的に DT が痴呆性高齢者の日常行動の改善に役立つことを示唆している。

**Key Words** : ドッグセラピー, ケア, 痴呆

日本痴呆ケア学会誌, 2(2) : 150-157, 2003

## 緒 言

わが国でも、最近アニマル・セラピーの言葉が頻繁に聞かれるようになってきた。アニマル・セラピーは、老人ホームや精神科病棟などの各種施設で、動物を飼ったりボランティアの人に動物を連れてきてもらったりする活動を通して、コミュニケーションの増進や各種の障害の改善に役立たせる治療法である<sup>1)</sup>。

アニマル・セラピーという用語も歴史的にかなり変遷してきている。現在、学術報告では一般的に、治療と評価を伴う場合には「動物介在療法」(animal assisted therapy:AAT)、それらを伴わ

ない場合には「動物介在活動」(animal assisted activities:AAA) という用語が用いられている。

動物介在療法の 1 つであるドッグセラピー(dog therapy:DT)に関する研究は、1970 年代中ごろコーソン夫妻 (Corson,S. & Corson,E.)<sup>2,3)</sup>がオハイオ州立病院で始めたのが最初である。コーソン夫妻は、社会性が低下している精神科入院患者に DT を行い、50 名中 47 名の社会性の改善を報告した。また、老人ホームにおいても DT を試み、施設利用者の自信の回復と、施設利用者同士および施設利用者と施設スタッフとの社会的相互作用の増加などの効果が認められたことを報告した。それ以後、さまざまな実践的活動が行われ、多くの報告がなされるようになってきた。

しかし、1980 年ごろまでの研究は科学的な手順に基づく実験研究ではなく、臨床例の報告であった。そのため 1980 年代にはいり、治療効果の評価や、効果をもたらす要因の分析など、科学的な

受付日 2003.4.12/受理日 2003.8.8

\*1 Mitsuhiro Mano : 日本レスキュー協会

\*2 Madoka Uchizono : 甲子園大学大学院人間文化学部

\*3 Tsuyoshi Nishimura : 甲子園大学

\*1 〒560-0021 大阪府豊中市本町 4-1-24 アクティブビル 2F

評価の必要性が強く意識されるようになってきた。

わが国でも 1980 年代の後半から動物介在活動は広く行われるようになってきたものの、治療目標を設定した動物介在療法はあまり行われてこなかった。その理由の 1 つとして、動物介在療法実施のための詳細な情報を得にくかったことがあげられる。近年、心理学、精神医学、獣医学、比較行動学などの分野から、AAT に関する研究報告がなされつつあるが、それらの研究では、必ずしも治療効果の適切な方法による評価が行われているとは言い難い。DT の有効性についても、最近、計量的評価の成績が報告されるようになってきたが<sup>4)</sup>、さらに検証を重ね、評価を確実なものにしなければならない。

そのような状況のなかで、今回われわれは痴呆性高齢者に対する DT の有用性を確認するための系統的な研究に先立って、予備的検討を行ったので、その結果を報告する。

## I. 対象と方法

対象：社会福祉法人兵庫県社会福祉事業団特別養護老人ホーム（万寿の家）入所中の犬に強い嫌悪や恐怖を示さない痴呆性高齢者で、アルツハイマー型痴呆と診断された計 10 名（男性 2 名、女性 8 名、年齢 72～92 歳）を対象とした。痴呆の程度は N 式精神機能検査による判定で、軽度痴呆 1 名、中度痴呆 4 名、重度痴呆 3 名であった。

方法：日本レスキュー協会で訓練を受けたセラピードッグ（以下 TD）とドッグセラピストが、平成 14 年 9 月から同年 12 月にかけて、週 1 回老人ホームを訪れ、毎回 30 分の DT プログラムを計 12 回施行した。今回は高齢者と TD の交流が、高齢者の心理的ないしは行動に及ぼす影響を可能な限り他の要因を排して観察するために、セラピストの役割は必要最小限の指示を TD に与えることにとどめた。

痴呆の程度により、被験者を 2 グループ各 5 名ずつにわけ、各グループに適した DT プログラム

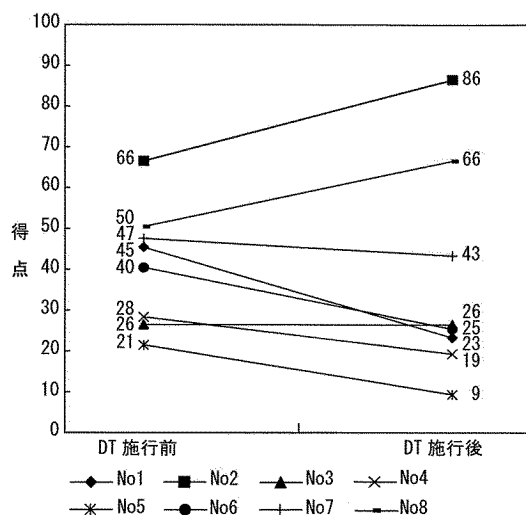


図1 N式精神機能検査

を行った。具体的な内容は次のようなものである。

①あいさつ：TD が高齢者 1 人ひとりの前を順に通る際に、TD に触れながら「こんにちは」などのあいさつをする。

②キャッチボール：高齢者がボールを投げ、TD がボールを拾って次の高齢者に渡す。

③ブラッシング：ブラシで TD の毛並みを整える。

④お水やり：器に水を入れ、TD に与える。

⑤おやつあげ：TD に指示した動作をさせて、おやつを与える。

⑥リボン結び：TD の頭にリボンを結びつける。

治療効果の評価には、①DT 施行前後に N 式精神機能検査、②DT 施行前後および中間の計 3 回、GBS スケール（痴呆症状評価尺度）を本調査の目的に合わせて一部改変した評価尺度による日常行動評価、③毎回の DT 実施中には、行動観察の目的で作成した評価尺度による行動評価を行った。なお、N 式精神機能検査および、DT 実施中の行動評価については日本レスキュー協会のドッグセラピストが行い、日常行動評価については万寿の家の介助スタッフが行った。

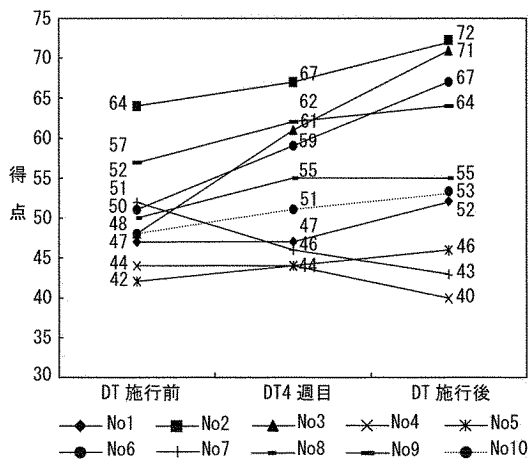


図2 日常行動観察

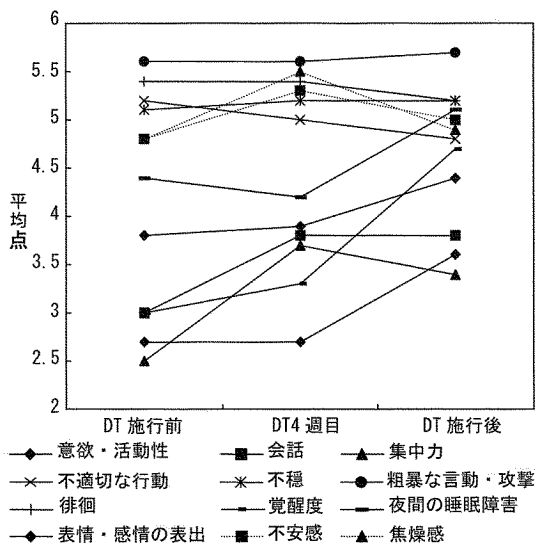


図3 日常行動観察項目別平均点

## II. 結 果

### 1. N式精神機能検査

図1はDT施行前と後のN式精神機能検査の結果を示したものである。DT施行前と後での合計得点は、8人中2人が上昇、5人が低下、1人は変わらなかった。DT施行前に高得点であった2人で、DT後の得点が上昇していた。もっとも上昇した人で20点、もっとも低下した人で22点の変動があった。

### 2. 日常行動観察

図2は日常行動観察の結果を示したものである。日常行動観察はDT施行前、DT4週目、DT施行後と3回行っている。合計得点をみると、10人中8人が施行前より施行後の方が高くなっており、2人は施行後低下した。もっとも得点が増加した人で23点、もっとも得点が低下した人で9点の変動であった。全被験者の平均は、DT施行前50.3点、DT4週目53.6点、DT施行後56.3点であった。

図3は全被験者の項目別平均点の推移を示したものである。DT4週目に「会話」「集中力」「不安感」「焦燥感」で、急激な上昇がみられる。それ以外の項目に関しては、大きな変化はみられない。DT4回目以後の変化をみると、「意欲・活動性」「覚醒度」「夜間の睡眠障害」「表情・感情表出」で顕著な上昇が認められる。他の項目では4回目以後大きな変動はみられなかった。

DT施行前後の得点差について、項目ごとにWilcoxon検定を行った。その結果、「意欲・活動性」「会話」「集中力」「覚醒度」「夜間の睡眠障害」「焦燥感」の6項目において有意な差( $p<0.05$ )が認められ、全項目の合計得点でもDT施行前と施行後に有意な差( $p<0.05$ )が認められた。つまり、「意欲・活動性」「会話」「集中力」「覚醒度」「夜間の睡眠障害」「焦燥感」はDT施行後、有意に改善されたといえる。

### 3. DT中の行動観察

図4はDT中の行動観察得点を毎回被験者ごとにプロットし、その推移を示したものである。最低は6点、最高は35点である。得点の推移は被験者ごとに異なるが、平均をみると、2回目で急激に上昇し、その後、徐々に低下していき、最終回では初回とほぼ同じ得点になっている。

図5は全被験者の項目別平均点を各回プロットし、その推移を表したものである。「着座時間」に関しては、着座したままのプログラムが多かったため、ほとんど変化していない。その他の項目に

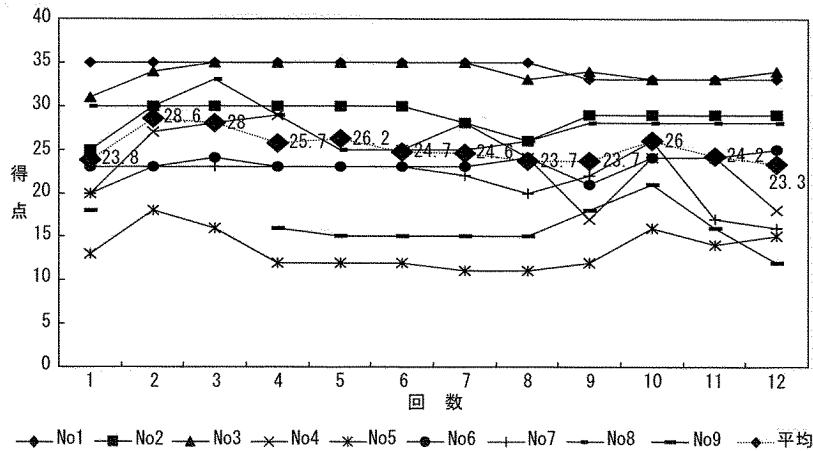


図4 DT中の行動観察

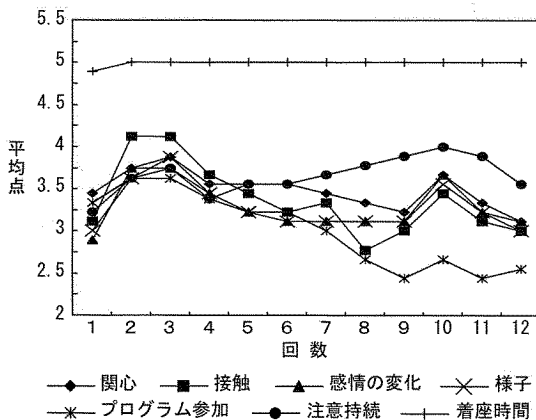


図5 DT行動観察の項目別平均点

関しては、DT2とDT3で上昇し、DT4で低下しているといった共通点が認められる。多くの項目においてDT3でピークに達した後、低下しているがとくに「プログラム参加」ではその傾向が顕著である。逆に「注意持続」は回数を重ねても低下せず、むしろ徐々に上昇する傾向を示している。また、TDへの「関心」も最後まで著しい変化を示さず、ほぼ一定の水準を維持していた。

#### 4. 症 例

以下にDTで日常行動に顕著な改善が認められた2症例の概要を記す。

##### 【症例1】T・Y 女性 84歳

診 断：アルツハイマー型痴呆

既往症：左大腿骨頸部骨折（左人工骨頭術）

障害状況：筋力低下、振戦あり、立位・歩行、不安定なため車いすを使用  
 会話・言葉にどもることがあり、たどたどしく話す  
 記憶障害と見当識障害あり  
 時々失禁あり

家族歴・生活歴：同胞2人、第2子。子ども3人。

40歳位に夫と死別。それ以来、家政婦、料理店勤めなどで子供を育て独立後、一人暮らし。80歳ころより痴呆が始まり、入所した。

性 格：何でも自分でやるという意識が強く、人の世話をよくし、公平に物事の判断をする。機嫌の良いときは冗談を交えて非常に明るい。幼いころは木登りが得意なおてんばだったとよく話す。手作業を好む。

処遇上の問題：人が話をしていると自分のことをいわれていると思い興奮したり、物がなくなると盗られたといい被害妄想になり暴言をはく。被害妄想が強くなると、「預けてある金を全部出せ、宮崎県に帰る」といって事務所に行く。

経過：

普段から帰宅欲求が非常に強く、「家に帰りたい」と繰り返し訴え、徘徊を繰り返し、職員の対応を必要とすることが多かった。日常生活では強い興奮、暗い表情が顕著であった。Tさんは幼少のころ犬を飼っていたこともあり、TDへの関心やプログラムの参加意欲は高かった。

初回からTDと積極的に触れ合い、DT中は表情が明るく帰宅欲求もみられなかった。TDにより、飼っていた犬を背中におんぶして遊んでいたところを鮮明に思い出し、うれしそうに繰り返し語る場面がみられた。また、日常生活でも興奮や徘徊などの対応時にTDの話をすると穏やかになり、表情も豊かになった。他者への配慮も見受けられるようになってきた。近時記憶が難しく、DTの翌日にはTDが訪問していたことを覚えていなかったが、回を重ねるごとにTDの訪問がある程度記憶に残る(2~3日)ようになっていった。

DT終了後、N式精神機能検査ではDT施行前に比し施行後には22点の低下。日常行動観察では、「意欲・活動性」「会話」「覚醒度」で顕著な改善が認められた。DT中の行動観察では、毎回ほぼすべて満点で、慣れないしは飽きによるスコアの低下はみられなかった。

【症例2】Y・S 男性 71歳

診断：アルツハイマー型痴呆

既往症：聴覚障害(聾唖) 簡単な手話、文字で会話可能、意思疎通に困難なときがある  
聾唖(生来性)

障害状況：聴覚障害(聾唖) 簡単な手話、文字で会話可能

下肢筋力低下のため車いす使用

家族・生活歴：同胞1人、第2子。聾唖学校卒業後、マッチ工場で働く。両親と死別後、単身で年金暮らしをする。64歳ころより徘徊あり。路上で倒れ入所となる。

性格：几帳面できれい好きである。人が話していると自分のことをいわれていると思う込むことがある。他者との話が困難な

め、孤立し協調性もなく、消極的である。

処遇上の問題：他者とのコミュニケーションが十分でないため、人が会話していると自分の悪口をいわれていると誤解し、その人に嫌がらせ、迷惑行為、いたづらをする。他人の金銭を盗ったり、菓子やジュース等を盗って食べることがある。他の人が悪いことをしていると、逐一職員に報告にくる。

経過：

普段は周りの人とのコミュニケーションが困難なため、誤解が生じやすく、孤立し、ストレスから他の人に嫌がらせをするなどの問題行動がみられていた。

Yさんにとって、言葉の要らない関わりができるTDとの触れ合いは大きな影響を及ぼした。まず、TDとの非言語性のコミュニケーションができることによって、満足感が得られ、ストレスが軽減された。さらに、TDを介することで他の人との関わりがスムーズになり、仲間意識をもつようにならっていく様子が見られた。このことは日常行動観察でも顕著に現れている。YさんはDT施行前、会話や集中力、覚醒度に乏しく、他者とのコミュニケーションや活動性に問題があり、日常行動観察得点は48点で低いほうであった。しかし、DT4回後の日常行動観察では、「意欲・活動性」「会話」「集中力」「覚醒度」「感情の表出」で顕著な改善を示し、DT施行後の日常行動観察得点は71点となった。

Yさんはもともと日常行動に問題のある人ではなかった。しかし、コミュニケーションの障害のため、ストレスを生じ、それが問題行動や活動性の低下として現れていたと考えられる。TDと出会い、言語を介しないコミュニケーションの成立によって、Yさんの情緒は安定し、自尊心を回復した。またTDが媒体となり、周囲の人々とのコミュニケーションが促進され、それがYさんの覚醒度を高め、表情も豊かになり、生き生きとした生活を回復させたと思われる。

### Ⅲ. 考 察

われわれは、痴呆性高齢者に対する DT を試みた。以下に、評価尺度ごとに若干の考察を加え、痴呆性高齢者に対する DT の問題点と課題について検討を加える。

#### 1. N 式精神機能検査

図 1 に示されたように、多くの被験者に DT 施行後の得点低下が認められる。これは被験者が痴呆性高齢者であることから、DT 施行前と後の約 12 週の間における自然低下ではないかと考えられる。反対に得点が上がった被験者は、DT 施行後の得点からも分かるように、もともと痴呆の程度が軽く、潜在的な能力があったと推測される。改善した項目は「年齢」(被験者 No2, No9)「逆唱」(被験者 No2)、「月日」「物語再生」(被験者 No9)である。DT 施行前には覚醒度や意欲低下のために、見かけ上、低スコアを示したものが、DT による覚醒度や意欲の改善に伴って、潜在能力が発揮され N 式検査の成績も改善されたといえることができる。

しかし、日常行動観察の成績にみられるように、覚醒度や意欲の改善は N 式検査の成績が改善しなかった被験者にもみられることから、DT による知的機能の改善が期待できるのは、かなりの潜在能力ないしは、残存機能を有する者に限られると考えられる。

#### 2. 日常行動観察

図 2 に示されたように、日常行動観察では多くの被験者で改善がみられた。その内容をみると(図 3) とくに「意欲・活動性」「会話」「集中力」「覚醒度」「夜間の睡眠障害」「焦燥感」「夜間の睡眠障害」では有意差が認められることから、DT の効果の中心がここにあると思われる。つまり、日中は意識が賦活され覚醒度が上がり、さまざまことに意欲を示し、活動的になり、夜間には睡眠が充分とれるというように日常生活のリズムが回復す

るようになる。

DT 開始後の日常行動の全般的な改善傾向は、DT4 週目までは緩やかな変化であるのに対し、4 週目以後から大きな変化がみられたことから、DT の効果は長期間継続することで現れてくるものと考えられる。

観察項目ごとの改善経過をみると、「会話」「集中力」「不安感」などは早期に改善を示したのに対し、「覚醒度」「睡眠障害」などの改善は遅れて現れ、DT の効果が早期から認められるものと、回数を重ねたのちに現れるものがある。

#### 3. DT 中の行動観察

図 4 をみると、DT の新奇性効果と「慣れ」の現象があることが分かる。つまり、初回では「普段見慣れぬもの」に対する好奇心と戸惑いのうちに過ぎるが、2 回・3 回と回を重ねるごとに TD と会うことに楽しみを覚え、DT 中の行動全般が活発になる。しかし、4 回目ごろになるとしだいに TD に慣れるとともに、飽きが生じるものとみられる。とくにこのことが顕著にみられるのが「プログラム参加」への意欲である。回数を重ね DT に慣れ、目新しさがなくなると自分から積極的にプログラムに参加しなくなる傾向を示す。これは、同じ DT プログラムが繰り返されるために次第に興味を失うものと考えられる。しかし、飽きがくることは、必ずしも TD への関心がなくなることの意味するのではなく(図 5)、TD への関心は最後まで保持されていた。

#### 4. 痴呆性高齢者に対する DT の問題点と課題

今回われわれは、少人数の対象に対してではあるが、12 週間にわたる DT を施行し、「覚醒度」「意欲・活動性」「睡眠障害」「会話」「焦燥」「集中力」などに有意の改善を認めた。

痴呆の中核症状である知的機能低下に対しては、直接的な改善効果を認めることはできなかったが、「覚醒度」「意欲・活動性」などの改善と情緒の安

定化により、潜在的能力を発揮することができるようになった結果、知的機能が改善されるケースがあることが分かった。

しかし、DT 施行中の痴呆性高齢者の行動観察においては、DT の回を重ねるにつれて、プログラムへの参加や TD への接触到積極性が乏しくなる傾向が認められたが、TD への関心や注意の持続には最終回までいちじるしい低下が認められなかったことは重要な示唆を含んでいる。すなわち、プログラムへの参加や TD に触れることには飽きて興味が乏しくなっても、TD の存在には関心や注意を向け続けているのであるから、DT の実施方法やプログラム内容の工夫によって、好奇心をそそり、飽きや興味の喪失を防ぐことができれば、DT の効果をいっそう上げることが期待できる。

DT の問題点の 1 つは、対象者の犬に対する好き嫌いの点である。今回の対象者選択にあたっては、その点をとくに考慮しなかったが、対象者 10 名のうち犬を好まないものは 1 名のみであった。たとえ元来、犬を好まない場合でも、よく訓練された TD に会う回数を重ね、他の参加者たちが安全に TD に接しているのを見ることにより、警戒心や恐れは薄らぎ、しだいに好奇心や関心をもつようになると考えられる<sup>5)</sup>。

今回の試みでは、効果判定のための評価尺度として、N 式精神機能検査、GBS を本研究の目的に合うよう一部改変したものおよび独自に作成した行動観察尺度を用いた。これらの評価尺度は今回の研究目的の達成には有用であったが、日常行動観察および DT 中の行動観察のための評価尺度は、今回の経験を生かして、さらに改良することが望ましい。

DT の有用性を調べる方法として、今回は DT 前後での比較を行ったが、厳密にいうと、ここで得られた結果は必ずしも純粋に TD 介在の効果を示しているとは限らない。それは、プログラムの実施にあたっては TD だけでなく、必ず TD とドッグセラピストとのペアで行われるからである。したがって、そのような形で行われる DT の効果

は、TD とセラピストとのチームがもたらす効果であると理解しなければならない。

一般に痴呆性高齢者に対する治療の効果を判定する場合、治療期間が長ければ、その期間における痴呆の進行を考慮しなければならない。今回の DT 実施期間は 12 週間であった。本研究の対象者 10 名のうち 8 名は、DT 後、N 式精神機能検査で DT 前より低値を示した。この成績は一見、DT が痴呆性高齢者の知的機能の改善に有用でない印象を与えるが、DT を施行しなければ、より大きな低下があったかもしれない可能性を否定することはできない。したがって今後、痴呆の自然経過による能力低下を考慮に入れた評価方法を検討する必要がある。

本研究で示されたように、週 1 回の DT 施行により、痴呆性高齢者の日常行動全般にわたる改善効果が認められたが、その効果が比較的早期に出現するものと、遅れて現れるものがあることは興味深い。「不安・焦燥」「集中力」「会話」などは DT 開始後 4 週目にかなりの改善を示し、それより遅れて「意欲・活動性」「覚醒度」「睡眠」などの改善が認められた。このような DT の効果発現の時期の違いが生じる理由の検討も DT の有用性を高めるために必要である。

## 結 語

わが国における DT の経験はまだ多いとはいえないし、DT の有用性についての計量的な検討も十分ではない。そのような状況下で、今回、われわれは痴呆性高齢者に対する DT の有用性について系統的な研究に取り組む予備的段階として、少数例についてではあるが、計量的な検討を行い、DT の有用性を確信できる成績を得た。今後は本研究の成績と経験を踏まえて、多数例につき、より広範で精確な検討を行いたい。

さて、痴呆性高齢者のケアにはケアに関わるすべてのスタッフの多大のエネルギーを要する。最近、DT が直接の対象となる高齢者だけでなく、

DT やケアに関わるスタッフの行動にも変容をもたらすことが指摘されている<sup>6)</sup>ことから、DT とスタッフの行動、意欲、感情などとの関係を明らかにすることも、DT の有用性をより広い視野で評価するうえで意義があると考えられる。

#### 【文 献】

- 1) 岩本隆茂, 福井至: アニマルセラピーの理論と実際, 1-4, 培風館, 東京 (2001).
- 2) Corson SA., Corson EO: Pets as mediators of therapy. *Current Psychiatric Therapies*, 18: 195-205 (1978).
- 3) Corson SA, Corson EO, Gwynne PH, et al.: Pet dogs as nonverbal communication links in hospital psychiatry. *Comprehensive Psychiatry*, 18: 61-71 (1977).
- 4) 金森雅夫, 鈴木みずえ, 山本清美, ほか: 痴呆性老人デイケアでの動物介在療法の試みとその評価方法に関する研究. 日本老年医学会雑誌, 38(5): 659-664 (2001).
- 5) 内藤智道, 渡辺全朗, 大林公一, ほか: 精神科患者における動物介在療法に対する意識調査. 臨床精神医学, 31(6): 675-679 (2002).
- 6) 加藤譲介, 渥美公秀: 動物介在療法の導入による集合性の変容過程: 老人性痴呆疾患治療病棟におけるドッグ・セラピーの事例. 実験社会心理学研究, 41(2): 67-82 (2002).

## A trial of dog-assisted therapy for elderly people with Alzheimer's disease

Mitsuhiro Mano<sup>\*1</sup>, Madoka Uchizono<sup>\*2</sup>, Tsuyoshi Nishimura<sup>\*3</sup>

<sup>\*1</sup>Japan Rescue Association, <sup>\*2</sup>Graduate School of Humanities Koshien University,

<sup>\*3</sup>The College of Humanities Koshien University

The paper reports on a trial of dog-assisted therapy (DAT) for elderly people with Alzheimer's disease. Study subjects were ten elderly residents (72-92-year old) with Alzheimer's disease in a care facility. The dog-assisted therapy session was consisted of approximately thirty minutes semistructured recreation session with a therapy dog and a dog trainer. Outcome was measured by comparisons of pre- and post-DT scores of N-dementia scale, GBS scale with a partial modification, and a behavior scale specially provided for this study. After the twelfth DT session, some of psychological or behavioral problems such as drowsiness, anxiety, and insomnia were markedly improved. While active attitude toward participation in DT was gradually weaken after the fourth session, attention and interest to the therapy dog were kept well to the last session. The result indicates that DT is useful to improve activities and emotional state of elderly people with dementia. Consequently, it is suggested that for DT to be able to continued without losing interest of participants for a long period, gradual change in the recreation programs is desirable as the session progresses.

Key words: dog therapy, care, dementia